

文化芸術・スポーツが生み出す 都市の魅力と発展

(公財) 後藤・安田記念東京都市研究所 研究員 ^{はまだ}濱田 ^{めぐみ}愛



第85回全国都市問題会議（主催…全国市長会、(公財)後藤・安田記念東京都市研究所、(公財)日本都市センター、八戸市、協賛…(公財)全国市長会館）が、2023年10月12日（木）、13日（金）の2日間にわたり青森県八戸市の八戸市公会堂・公会堂文化ホールにおいて開催された。「文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展」というテーマの下、市区長や市区議会議員など約1800人が全国各地より参集し、1日目は開会式、基調講演、主報告、一般報告が行われ、2日目はパネルディスカッション、閉会式、行政視察（希望者のみ）が実施された。

開会式



開会あいさつを行う立谷会長

開会式

開会式の冒頭では、主催者を代表して全国市長会会長の立谷秀清・相馬市長による開会あいさつがあり、続いて熊谷雄一・八戸市長による開催都市長あいさつがあった。また、宮下宗一郎・青森県知事からビデオメッセージによる祝辞をいただいた。

基調講演

東京藝術大学長、アーティストの日比野克彦氏より「アートの役割って何だろう？」というテーマで基調講演が行われた。アーティストとしての自身の活動を通じたアートによる社会課題へのアプローチを提示するとともに、アートと社会との接続に向け同大学が進めているプロジェクトなどを紹介し、参加者らのアートへの認識を新たにした。

冒頭では2021年に開館した八戸市美術館に言及し、美術館が有する「ジャイアントルー

基調講演



日比野・東京藝術大学長、アーティスト

ム」という特徴的な空間は、I COM(国際博物館会議)により2022年に更新された「博物館(美術館も含む)」の定義に基づき、地域の中でのコミュニティと交流の拠点となっていくものである、と解説した。

続いて、日比野氏がこれまで継続的に取り組んできたアートによるコミュニティづくりの活動として、出身地である岐阜県岐阜市における「こよみのよぶね」をはじめ、茨城県水戸市で開催している「HIBINO CUP」、水戸芸術館や金沢21世紀美術館での「明後日朝顔プロジェクト」、瀬戸内国際芸術祭での取り組みや、館長を務める熊本市現代美術館でのアート活動などが紹介された。市民らと一緒に「何かを『つくる』こと」などを通じたコミュニティの形成や、人間が物語を紡ぐ発想力を引き出す力など、社会的課題の解決に向けたアートの役割が示された。

さらに、アートによる社会的課題の解決を目指す東京藝術大学としての取り組みとして、「福祉×芸術」をテーマに多様な人々の共生を目指

主報告



熊谷・八戸市長

す人材育成プログラム「Diversity on the Arts Project」(通称DOOR)や、人とのつながりにより健康を促す「文化的処方」の実装を目指して2023年から開始され多くの企業や自治体が参加する「アートコミュニケーション共創拠点プロジェクト」についての紹介があり、併せて文化的処方についてイギリスの先進事例などが取り上げられた。

最後に、「アートは生きる力」というメッセージとともに、基調講演を締めくくった。

主報告

熊谷雄一・八戸市長により「八戸市の文化・スポーツによるまちづくり」のテーマに関する主報告が行われた。文化・スポーツに関する公施設整備を中心とした取り組みの意義と課題を報告した上で、それらの拠点を通じた地域のネットワークやコミュニティの形成への展望を示した。

八戸市が展開してきた文化によるまちづくり



として、2011年に整備された「八戸ポータルミュージアムはっち」や、そのプレ事業として2008年にスタートしたアートプロジェクト「酔っ払いに愛を 横丁オンリーユーシアター」をはじめ、2016年に開設した「八戸ブックセンター」や、2018年に開設した「八戸まちなか広場マチニワ」、2021年開設の「八戸市美術館」など、空洞化した中心市街地の都市機能再編と連動した文化施設整備や文化活動の取り組みを中心に説明した。

スポーツによるまちづくりでは、まず「氷都・八戸」の市民の文化として根付いているスケート競技の支援として、2019年に整備された

「長根屋内スケート場（YSアリーナ八戸）」や2020年に整備され官民連携で運営する「FLAT HACHINOHE」などの施設整備、競技人口の裾野を広げる「氷都八戸パワーアッププロジェクト」が紹介され、次いで、八戸市に拠点を置く四つのプロスポーツチーム（サッカーの「ヴァンラーレ八戸FC」、アジアリーグアイスホッケーの「東北フリーブレイズ」、バスケットボールの「青森ワッツ」と「八戸ダイム」と、それらを地域のスポーツの資源として活用し、市民による多様な関わりを提供する取り組みについての紹介があった。

市長は文化とスポーツが「生きる欲びに直接訴えかける」ような本質的な価値を有するとして、特に社会的価値について、人口減少下の地域社会における市民らのネットワークづくりとコミュニティづくりの観点からの効果に言及し、それらの拠点となる公共施設などバブリックな空間の重要性を説いた。

一般報告

1日目の10月12日の午後には、3題の一般報告が行われた。

1題目は、文化事業ディレクター、演出家の吉川由美氏より「まちづくりの活力は地域に根ざした文化政策から育まれる」と題した報告が行われた。これまでのアートプロジェクトでの経験を通じて、今の社会に求められている、これまでと異なる視点からの文化政策として、幅広い分野のプラットフォームに文化を位置付け地

域社会を醸成していく、地域に根差した在り方を示した。

吉川氏が約10年間にわたり担当してきた「八戸ポータルミュージアムはっち」のアートプロジェクトでは、市民と共に「地域の資源を大事に想いながら新しい魅力を創り出す」ことをテーマとして掲げ、三つの柱（①八戸の中心街をみんなの関心空間にする、②八戸の地域資源を再発見して再価値化する、③フラットな交流と対話の場を創出）を提示し、各プロジェクトについて紹介した。まちの人々の情報を吹き出しにする「八戸のうわさ」、開館記念の写真展「八戸レビュウ」、八つの横町を舞台にした「酔っ払いに愛を 横丁オンリーユーシアター」、古武芸の騎馬打毬きばだきゅうと中学校ロボコンを組み合わせた「はっち流騎馬打毬」、漁食文化をテーマにした「魚ラボ」、デコトラを衣装として作るワークショップなどの取り組みを通じて、市民らの普段の役割や立場の壁が取り払われ、対等に語り合い異なる価値観を認め合う場や、主役としてまちを動かす市民のマインドが醸成されていく様子を、現場の視点から報告した。

今求められている文化政策として、八戸三社大祭を題材にした「DASHIN」プロジェクトを例に挙げ、山車小屋での山車づくりの場がそこに関わる人々をコミュニティの一員として孤独から解放し、地域をつくる人を育てている様子を示し、「地域社会の分母」として日々の暮らしの中で文化を支えている市民の無償の奉仕に対する支援の必要性を指摘した。さらに、吉川氏が

一般報告



吉川・文化事業ディレクター、演出家



花岡・東御市長

鈴木・株式会社鹿島アントラーズFC
取締役副社長

アートプロジェクトを通じて携わった東日本大震災の被災地である宮城県南三陸町の戸倉地区において、震災後に漁師らが全員一斉に漁業権を放棄し、カキの養殖の利益を再分配する取り組みで国際認証を取得した復興について、「人は一人では生きられない」という地域に根差した「講」の文化が背景にあるとし、地域の力を育む場としてのアートプロジェクトの可能性を語った。

結びに、吉川氏は文化政策を料理の「出汁」のようなものと例え、地域社会の分母としての文化を支える、地域に根差した文化政策を考えていきたいと述べた。

2 題目は、花岡利夫・東御市長により「標高差1500mの地勢を活かしたスポーツ・ツーリズムの創出」と題して、東御市の地理的環境を地域資源として捉え、標高差を活用したトップアスリートの高地トレーニング施設の整備の経緯や、市民や一般の人々への波及効果についての報告があった。

東御市の平地が少なく標高差のある地形はこ

れまで土地利用としては欠点という認識が持たれていたが、その特徴を個性として捉え、地域資源として生かすための取り組みとして、主に農地をワイン用のブドウ畑に転用したワイナリーと、トップアスリートのための高地トレーニングの施設が整備されてきたと説明した。

高地トレーニング施設として東御市に整備された「GMOアスリートパーク湯の丸」について詳しく紹介があり、2021年夏の東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けて、長野オリンピックのレガシーである北陸新幹線や上信越自動車道による東京からのアクセスの良さを活用し、新たなレガシーとしてトップアスリートたちのトレーニング施設をつくることを目指して、さまざまな困難な状況の中で財源の確保や水泳競技の公認規格を実現するために打ち出されていた施策について報告した。

トップアスリートを受け入れるために必要な条件として、市長は、①練習施設、②休養・宿泊場所、③アスリートを支える食事、④プライ

バシーとセキュリティ、⑤医学的サポート、の五つのポイントを提示し、それらの高い水準を満たすためにスポンサーなどの協力を得ながら湯の丸にて実施した施設整備の取り組みについて紹介した。

最後に、高地トレーニング施設の波及効果として、高齢者の健康増進やトリアスロン競技者の利用、山に登って標高差を克服するイベントの開催など、市民や一般の人々への広がりを見せたことを示し、標高差を生かして盛んになりつつあるワインツーリズムとスポーツツーリズムを地域に還元し、市内外の人々にとつて訪れる価値がある地域として発展させていくという今後の展望を述べた。

3 題目は、株式会社鹿島アントラーズFC取締役副社長の鈴木秀樹氏より、「まちづくりにおけるプロスポーツクラブの有効活用」と題した報告が行われた。全国で100を超えるプロスポーツクラブと自治体との関係が問われる中で、Jリーグが開幕してからの30年間にわたり、

鹿島アントラーズが構築してきた地域との関わり
の経験を通じて、地域の資源としてのプロス
ポーツの活用の可能性を示した。

まず鹿島アントラーズの本拠地であり鹿島臨
海工業地帯を有する設立当初の5町村における
サッカーチームとスタジアムの設立から、ホー
ムタウン5市（鹿嶋市、潮来市、神栖市、行方
市、銚田市）とフレンドリータウンにおける公
的連携、2011年の東日本大震災を経て地域
との関係において新しい方向性へ舵を切った経
緯などについて説明があった。

スポーツクラブが地域にもたらす関係性の実
践例として、アントラーズのプロスポーツ専門のド
クターが一般市民も診療する体制を整えたり、
フィットネス事業や介護予防医療といった地域
医療への貢献、プログラミング教育や食育の取
り組み、学校での講演やスタジアムでの遠足の
受け入れなど、教育や人材育成への貢献などが
紹介された。さらに、プロスポーツが有する重
要な資産として試合時の観戦客などの「データ」
を挙げ、自治体の施策への活用を促した。

2006年より指定管理者制度を用いて運営
するスタジアムでは、ビジネスの制約を受けず
自由度を高めるために指定管理料をゼロにする
ことを一昨年から実験的に取り組んでおり、「ス
マートスタジアム構想」と題したチケットの電
子化などのデジタル化の試みや、芝生を保護し
て休ませるよりも使つて稼ぐという考え方、地
域のまちづくりの課題解決に寄与する新スタジ
アム構想など、スタジアムを活用したビジネス

の実践を報告した。

最後に、鹿島アントラーズのアセットを用い
てこれまでと異なる視点からの地域との関係を
探るため、2021年に新たに立ち上げたまち
づくり会社（株式会社KX）の紹介があり、コ
ミュニティを生み出すための「人づくり」を応援
していく方針を示すとともに、教育、育成、医
療などの観点からプロスポーツの資源を理解し
て地域で活用していくことを提言した。

パネルディスカッション

2日目の10月13日の午前はパネルディスカッ
ションが開催され、小林真理・東京大学大学院
人文社会系研究科教授をコーディネーターとし
て迎え、今川和佳子・合同会社manimu代表取
締役、松橋崇史・拓殖大学商学部教授、頼重秀
一・沼津市長、山崎善也・綾部市長らがパネリ
ストとして登壇した。

まず冒頭で、小林氏は「人間がいるところに
は必ず文化がある」と述べ、地域の持続にとつ
て「文化」が大切で、人々の生まれながらの権利
である一方で、単目的な文化行政の施策の在り
方に疑問を呈し、「文化」の領域を地域のコアと
してまちづくり全体に開いていき、各分野が連
携して文化で横串を刺すという、これからの地
域の文化振興の方策を示した。さらに初日の議
論の振り返りとして、アート・文化それ自体の
役割と可能性、地域資源の見直しとスポーツ振
興、人を育てる（行政・住民・事業者など）、ま
ちづくりを協働できる人や企業との成長、など



の論点を挙げた。

今川氏は「八戸の独自性が生み出してきたも
の」というテーマで、「はっち」のコーディネー
ターとして取り組んだプロジェクトや現在取り
組む事業について報告した。「はっち」では、
オープン前の3年間で約30のプレ事業を実施す
るなど、事前の段階からの市民との協働や相互
理解の重要性を説いた。

アートプロジェクトを通じて、市民が参加す
ることで思いもよらないものが出来上がってい
く面白さや、郷土芸能を習いに来たアーティス
トや漁師さんとの交流など、八戸にこぼれ落ち
ている小さいものや人を探し出し、感動を周り

パネルディスカッション

コーディネーター



小林・東京大学大学院人文社会系研究科教授

パネリスト



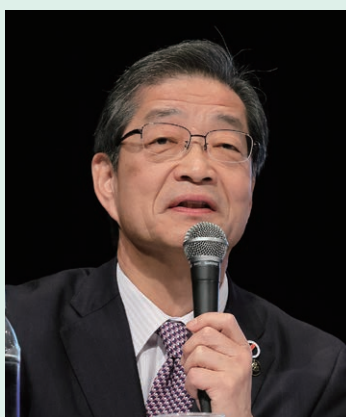
今川・合同会社imajimu代表取締役



松橋・拓殖大学商学部教授



頼重・沼津市長



山崎・綾部市長

に伝えるという取り組みの姿勢を示し、「酔っ払いに愛を 横丁オンリーユーザー」ではまちの人の寛容性や相互理解の高まり、「三陸国際芸術祭」では民俗芸能で若手の芸能者に着目することでこれからのアクションや交流が生まれている様子、「八仙」の酒蔵を活用して音楽やアーティストの入り口を作ること、人材育成や人のつながりに貢献した事例などを紹介した。

松橋氏は、「地域活性化におけるスポーツの役割とその変化」というテーマで、地域活性化とトップスポーツクラブ、地域活性化とスポーツ

政策、地域活性化で重視される考え方とスポーツの役割の変化、の観点から報告を行い、文化政策の中におけるスポーツの役割を提示した。

トップスポーツクラブと自治体との関係として、Jリーグがスタジアムやアリーナを有している地域の自治体から支援を得る必然性があったことから、地域密着という戦略的な理念を打ち出したことがスポーツと地域の距離を一気に縮める契機となったと説明し、クラブ・自治体の双方からスポーツクラブを用いた地域課題の解決に取り組まれつつある現状認識を述べた。

スポーツ政策については、国体の種目振興をはじめ、全国大会や世界大会などの開催がトリガーとなって各地のスポーツ振興が促されることを示した。

さらに、多様性の観点から、スポーツの道具やルールを変えろといった共生社会を実現するための解決策をスポーツが提供しつつある状況を示すとともに、スポーツ選手の懸命さを弱さや脆さも含めて情報として発信し、時代に伴って訴求されるスポーツの価値や地域活性化の文脈における役割を考えていくことの重要性を伝



えた。

頼重氏は、「スポーツとアニメを活用したにぎわいの創出」というテーマで、沼津市のスポーツ振興や、アニメの舞台としての取り組みについて紹介した。

2023年に整備された「香陵アリーナ」をはじめ、フェンシングの交流拠点施設「ES BASE」や、民間のBMXやMTBの練習場の「DKFERIDE MTB PARK」といった公設や民営のスポーツ施設の整備について紹介があり、続いて「フェンシングのまち沼津」としての取り組みや、「アスルクラロ沼津」をはじめとする沼津市を拠点とするプロスポーツチームとの連携事業、自然環境を生かしたサイクリングの環境整備などについての報告があった。

さらに、『ラブライブ！サンシャイン!!』2期の舞台となったことを契機に始めた、市内各地の聖地巡礼、民間事業者や商店街との協働、行政としての民間の活動のサポートや情報の発信、観光PRへの起用などの取り組みを紹介した。これらのスポーツやアニメの取り組みを継続し、市外の人々に興味を持ってもらうことで生じる交流人口や関係人口の増加につながるなどの効果を示唆した。

山崎氏は、「文化芸術・スポーツで紡ぐまち・綾部」というテーマで、「合唱のまち」の取り組みを中心に綾部市における文化やスポーツの推進について紹介した。

綾部市ではふるさと教育の一環として、市歌、踊り、太鼓を市民全体で普及啓発に努めている一方、高齢化で文化に関わる人の裾野が狭まっていることを踏まえ、育成型と鑑賞型を組み合わせた文化事業に取り組んでいるとの報告があった。さらに、スポーツではサイクリングやカヌー、登山レース、トレイルランなどの大会を開催してきており、地域住民による地域の地産地消の食べ物の提供なども地域振興へ貢献できることだと指摘した。

最後に、文化やスポーツはそれらを望む人が関わりやすい環境整備が行政に求められるとし、まちづくりへの方策として、Uターンなどの動機の一つとしてのふるさと教育や、移住・定住施策では、住んでいる市民の生活を楽しく元気にしていくことが大事で、それを見て遠くの人が訪れたいくなるようなまちづくりを目指したいと述べ、報告を終えた。

以上の各パネリストからの報告を踏まえて、ディスカッションでは、事前のコミュニケーションの時間を取って理解者を増やす重要性や、経済的価値や社会的価値だけではなく本質的価値を問う必要性などが示された。

閉会式

閉会式では、次期開催都市の清元秀泰・姫路

兵庫県 清



市長のあいさつ、(公財)日本都市センター理事の奥山恵美子氏より閉会あいさつが行われ、2日間の学びの場は、盛会のうちに幕を閉じた。

行政視察

午後には希望者による行政視察が実施され、参加者らは、

- 文化…八戸市中心市街地の文化芸術拠点「八戸ブックセンター」や「はっち」などを巡る
- スポーツ…市内の「長根屋内スケート場」やアースアリーナ「FLAT HACHINOHE」を巡る



陸奥国八戸総鎮守の法霊山籠(ほうりょうさんおがみ)神社に伝わる山伏系統の法霊神楽の披露。八戸三社大祭では迫力の一斉歯打ちを見せる



ユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」に登録されている八戸三社大祭の山車が展示された

- 歴史…文化財などを展示する「是川縄文館」の見学や、「えんぶり」鑑賞で歴史に触れる
- 自然…名勝「種差海岸」やウミネコの繁殖地「燕島」などの豊かな自然や景勝地を巡る
- 港…船上から港町八戸の漁港・自然・工業などが織りなす港湾風景を望む
- つなぐ…「多賀多目的運動場」や、救命救急医療を有する「八戸市立市民病院」を巡る
- の六つのテーマに分かれて視察を行い、この度の会議で議論された八戸市の文化芸術・スポーツをじかに体験した。

◆ ◆ ◆

今回の会議の議論を通じて、文化政策や文化振興・スポーツ振興を考えていく上で、まず「文化」という言葉の射程を、われわれの身近な生活のもの・ことから問い直す必要性を、それぞれの登壇者の共通のメッセージとして受け取った。吉川氏や今川氏が携わった「はっち」のプレ事業のように、事前段階からの地域との

閉会式



閉会あいさつを行う奥山・理事

関係構築や相互理解を通じて、市民の生活と有機的かつ連続的につながり、地域の空間やコミュニティを形成しながら、それらを通じた「文化」の新しい在り方を模索していく文化事業やスポーツ事業が今後求められていくことが示されたように思う。この度の議論を踏まえた政策の展開を通じ、各地の固有の「文化」とそれに結び付く市民らの生活が、持続し、芽吹き、発展していくことを切に願う。



次期開催市のあいさつを行う清元・姫路市長